



キム・キヨン（1980-）と知り合った2011年、私と彼は東洋言語学院美大受験コースの先生と生徒の間柄であった。私がこのコースを受け持った初めての年であり、キヨンは博士課程を受けたいと言う。デッサン、ポートフォリオを見る限り、アカデミックな技法を十二分に身につけており、着想も豊かな上に日本語と現代日本美術を旺盛に学ぼうとする姿勢を携えていた。キヨンは自力で京都芸術大学博士課程（中ハシクシゲゼミ）に無事、入学した。

2014年1月、突如博士論文を見てくれというメールが来たので、私は二日でチェックした。既に中ハシ教授が十分な指導を行っていたため、私がやることなど殆んどなかった。キヨンは京都に活動の拠点を定めながらも、東京での個展デビューを睨んでいた。キヨンと知り合った丁度同じ頃、私はステップスギャラリーでキム・ジェカンとも運命的な出会いを果たした。そして、キヨンとジェカンは或る意味で師弟関係であることもこの頃知った。

私はジェカンに2015年秋、彼の個人美術館に招待され、講演を行った。その時、通訳を果たしてくれたのがキヨンであった。本当の現代美術を東京で行うならステップスギャラリーしかない。キヨンは早々に予約した。ところが同じ頃、キヨンにブサンビエンナーレの展示長という仕事が

舞い込んできたのであった。私は2014年初夏、京都のギャラリーでキヨンの個展を見ていたので、何も心配していなかった。こうしてキヨンの東京デビューは行われた。そもそものキヨンの研究は、彫刻における同時代的な考察であり、日本のもの派、韓国モノクローム派、同時代の世界的な動向を探っていた。そのようなキヨンが博士課程でZENを本格的に学ぶとは、私は思いもよらなかった。寺で禅の修行をし、食べることはなくなるのか、削ることは消滅することかを書物で知識を得ながらも実践した。修了制作展の写真は木材を削った山であったし、京都の個展ではヴァイオリンなどをアスファルトで覆った。今回の個展で出品された作品群は、やかんを縦に切り開いたもの、バットを左右に配したものなど、上記の傾向の作品もあった。主な新作群は、自らが制作した彫刻や既製品をキャンバスにのせ、時間毎に点いたり消えたりする照明を入れて、サララップのような半透明の布でぐるぐる巻きに覆ったタイプであった。この作品群は見えるようで見えない、立体のようで平面と、禅問答のような要素に造形的意義が深く盛り込まれ、他に類のない作品となった。しかしキヨンであればこれ以上の発想の作品を、これから多く制作できるのであろう。今後も期待する。